

高校生諸君へ

はじめに

本連載は昨年10月から加藤陽子さんの『それでも日本は「戦争」を選んだ』を理解するために高校生の孫たちに向けて書き始めたものです。従って『日本史B』水準をめざしています。今回は1937年特集で膨大な量になりましたが最後まで読めるように工夫をしています。5冊以上の書籍を参考にしてありますので中味も濃いものになりました。頑張って読破してください。

「1937」（いくみな）という本があります。（辺見 庸著）
いくみな＝皆、行く 何処へ、何に向かって皆が行くのか？
1937年は国民の多くが結果的に戦争に向かって行きました。自覚のない人は歩いている道が気が付いたら戦争への道であったということです。現在の日本の状況が1937年によく似ているとする警告がこの本には感じられます。次の参議院選挙は安倍首相は「消費税延期」を表看板にかかげていますから大勝する可能性があります。本音は憲法改正ですから野党は不利な状況の中でも本質を見極めて戦うでしょう。
安倍政権は安部さんに代わる人がいないから仕方なく受忍している国民が多いのですが、来月の選挙は「歴史の歯車」をどちらに進めるかが問われる大事な選挙です。よく歴史を学んで必ず投票に行きましょう。
初めての投票を前に、政治家を見て嫌になる事ばかりが続いています。東京都の舛添要一知事の答弁をみても責任感と倫理感が感じられません。東京都民も何ができるか困っています。無力な一票かも知れませんが貴重な一票にもつながります。信じて投票しましょう

1937 前半

(1)、野上弥生子さんの祈り

作家の野上弥生子さんが1937年（昭和12年）の年頭の新聞で次のように書いています。

「・・・・たったひとつお願いごとをしたい。今年は豊年でございましょうか、凶作でございましょうか。いいえ、どちらでもよろしゅうございます。洪水があっても、大地震があっても、暴風雨があっても、・・・・コレラとペストがいっしょにはやっても、よろしゅうございます。どうか戦争だけはございませぬように・・・・」

（野上さんの生涯は明治18年～昭和60年）

この一文の重さをずっしり感じます。みんながいくところ（いくみな）が戦争でありませぬようにとの祈りです。どんな災難よりも怖いのは戦争であると体験者は語ります。語る人が少なくなり戦後生まれの人には実感が伴いません。それ故に苦しいけれども「戦争の残酷さとむなしさ」」 勇気をもって歴史を語らねばならないのです。

次の文章は野上さんの文章の1年前の永井荷風（昭和11年2月14日）の日記ですが、2・26事件の直前の記録で来たる時代の予兆を感じていました。（ベストピア前号参照）

「日本現代の禍根は政党の腐敗と軍人の過激思想と国民の自覚なきことの三事なり。政党の腐敗も軍人の暴行も、これを要するに一般国民の自覚に乏しきに起因するなり。個人の覚醒せざるがために起こることなり。然り而(しこう)して個人の覚醒は将来に於いてもこれは到底望むべからざる ことなるべし」（同上・[昭和史] p183）

現在は軍人がいませんから永井荷風の言葉は実感が持てないかも知れませんが、今回の参議院選挙で与党が衆参議院で3分の2を獲得した時点で日本の歴史の流れが確実に変わります。このことを自覚しない人が多

数をしめると「いくみな」の道になる可能性があります。皆で行ってはいけない道があるのです。それがどんな道かを1937年を振り返って見てみます。

(2)、腹切り問答

現在の国会議事堂は1936年（昭和11年）11月7日完成して第70回帝国議会が開かれ、その最初の衆議委員本会議1937年1月21日浜田国松議員が次のような要旨の発言をしました。

「陸軍将校による東京でのクーデター、すなわち二・二六事件を契機とする特殊なる我が国の政情に対し」「国民の有する言論の自由、通信の自由は数々なる事情によって圧迫を受け」「肅軍の進行とともに独裁的思想の重圧が増した」「軍人は政治に関わってはならないはずである。軍という立場で政治を行うところに危険がある」と陸軍の政治干渉を痛烈に批判する演説をおこないました。

これに陸軍大臣寺内寿一は

「浜田君のお言葉はいささか軍人を侮辱さるる感じがする」

浜田代議士

「どこが侮辱しているか。事実をあげよ。速記録を調べて僕が軍隊を侮辱した言葉があつたら割腹して君に謝す。なかったら君、割腹せよ！」

（大幅な要約、歴史に残る大演説）

この為、議会は翌日より停会することとなりましたが寺内寿一陸相は「政党（浜田は立憲政友会）が時局に対して認識不足である」として議会解散を主張しました。海軍には予算の成立が急務であったので説得をしましたが内閣不一致で23日広田内閣は総辞職に追い込まれました。

腹切り問答で寺内陸軍大臣は負けたようにみえますが、軍は議会に報復するかのように、統帥権の独立を楯に、政府に独断で軍事作戦を展開するようになります。

後継首相には、元陸相宇垣一成が選ばれましたが、軍縮を主張したこともある宇垣を陸軍は認めず、元陸相林銑十郎が、2月2日に内

閣を組閣することになります。林銑十郎将軍は、1931年、朝鮮軍司令官当時、越境将軍として独断、満州に派兵したことがあり、陸軍の傀儡内閣といわれ、三ヶ月で退陣。続いて、四十五歳の公爵近衛文磨が、国民、軍、財界の大きな期待を担って登場することになります。

(3)、2月4日、日独合作映画『新しき土』公開

前年11月25日の日独防共協定の調印記念、両国の親善を文化交流を目的として制作された映画です。監督はドイツのアーノルド・ファンク、日本側は伊丹万作、主演は18歳の原節子でした。

物語は、農家生まれで旧家に養子に出され、養家の娘（原節子）と婚約をしている地質学者が、欧米留学後に因襲的結婚に疑問を抱きはじめ、婚約破棄を申し出る。然し、日本の「狭い農地と土」を目にし、又周囲の説得によって自らの使命を悟り、自殺寸前の婚約者を連れて満州という「新しい土」で生きていくというストーリーだそうです。

この映画で一躍人気スターとなった原節子は、ドイツの招待によって3月10日ベルリンに向けて出発。ドイツでも、この映画は「武士の娘」というタイトルで封切られ圧倒的な人気を得たが、その背景には、ドイツ

政府が映画のドイツ公開に際して大々的な報道を行うようにマスコミに指令していたという（日本通信教育連盟発行「昭和・上巻」p90）

（宣伝放送中の原節子）



(4)、4月6日、「神風号」ロンドンへ飛ぶ

新聞社は激しい報道合戦を繰り広げ飛行機を所有して世界の情報を集めていました。陸軍航空技術研究所の藤田雄蔵大尉（当時）は司令部偵察機に適する長距離飛行可能な航続性能の技術を持っており、それを朝日新聞社に「何かやってみてはどうか」と話しを持ちかけました。丁度フランス航空省がパリ～東京間100時間以内での連絡飛行に懸賞金をかけていましたが何人ものフランスのパイロットが失敗していました。朝日新聞社はこれに挑戦するかのよう藤田大尉の話に乗り自社の二人のパイロットに飛行をさせましたところ、東京～パリ間92時間で見事に目標を達成、ロンドンには94時間17分56秒で到着、現地でも賞賛されました。朝日新聞社ではこの事業にいくつかの賞金をかけましたがこの時間をピッタリと当てた人が5人もいることは驚きです。

この飛行機は後に九八式陸上偵察機として採用されています。この飛行機の名称も全国からの応募となり「神風号」と決まりました。



(5)、4月15日、ヘレン・ケラー初来日

ヘレン・ケラーを日本に招聘したのは、岩橋武夫さん（自身は早稲田大学在学中に失明、母と妹に助けられ関西学院文学部を卒業、愛盲事業に一生をささげ、数々の業績を残したライトハウスを創設された）

サリバン先生を天国に召された傷心の癒えない時期の来日でした。
天皇と観桜会で会われました。（当時の首相は林銑十郎も出席して会っています）

又、中村久子さんと会われ「わたしより偉大な人」と賞賛しています。
来日の目的は障害者への励ましと日米親善でした。ヘレン・ケラーは障害福祉にとどまらず婦人の解放、死刑の廃止、平和と反戦を唱えていましたので、この頃日本はアメリカを仮想敵国として、軍備を強化していましたから、ある人々からはスパイではないかと嫌疑をかけられています。

横浜港で客船待合室でヘレン・ケラーの財布が盗まれます。

これを知った国民からお詫びの手紙や寄付が沢山寄せられました。一連の事件に対してのヘレン・ケラーの談話です。

「私は盗んだ人の事情に同情しこそすれ、その人をにくんだり、日本を誤解するような事はまったくありません。むしろこの出来事によって、日本全国の方々から大きな思いやりを寄せられ、また国民がおたがいに助け合うという日本人独特の精神を見る事が出来て本当にうれしく思います。」

8月10日迄滞在し多くの施設を慰問して励ましています。お土産はヘレン・ケラーの希望で2頭の盲導犬が贈られましたがその名は「カミカゼ」と「ケンザン」ということでした。

（日本人はカミカゼというのが好きですね）

(6)近衛文麿内閣総理大臣となる

6月4日、西園寺公望の推薦により近衛は再び大命をうけ、45歳7ヶ月の若さで国民からも期待されて総理大臣に就任しました。1936年に乞われたときはテロの標的になるのを恐れて辞退しています。

初代首相・伊藤博文に次ぐ史上2番目の若さでした。第二次・第三次内閣を組閣し1941年10月18日東城英機にバトンタッチします。

戦後は日本国憲法をいち早く作ろうとしますがA級戦犯となり、12月16日自害しています。

1937年後半(1)

(1)、盧溝橋事件勃発の原因

支那駐屯軍の増員（1936年5月）

満州事変（1931年9月～1933年5月）は塘沽協定で一応の停戦ということでしたが、関東軍はその後自作自演の謀略を繰り返し「梅津・何応欽協定」「土肥原・秦徳純協定」を強引に結ばせ1935年12月には非武装地帯に傀儡政府（きとうぼうきょう自治政府を）樹立し、更に非武装地帯を北京天津に移動すると武力威嚇をしていました。このような一連の暴挙は本来ならば統帥権の干犯であり、軍法会議で厳罰に処せられるべきにもかかわらず東京の参謀本部は追認しつつも、関東軍の独断と既成事実作りに手を焼いていた（怠慢の何ものでもないのです）

日本には関東軍の他に中国に支那駐屯軍（日本軍）がありました。これは1901年の義和団事件の後に関係11ヶ国が北京と海岸の要所を占領する権利を獲得し、翌年、天津全市への駐兵権が認められ、日本軍も1771名の兵員を駐留させ、その名を支那駐屯軍（日本軍）としていました。

関東軍と支那駐屯軍（日本軍）はその守備範囲を棲み分けており、関東軍はソ連と対峙し、満州を守ることを任務とし、北京天津は支那駐屯軍（日本軍）の守備範囲でしたが、関東軍は塘沽協定等の中国側の履行状況を監督するために南下（長城線を越える・北支進出といいます）しそのさらなる存在感を示し強引な行動に勢いがついていました。これを抑止しようとして広田内閣は支那駐屯軍（日本軍）を3倍の5774人増員を決議し1936年5月に中国に無断で実施しました。

非常におかしな話で説明に窮するのですが、関東軍（日本軍）の進出を抑えるために支那駐屯軍（日本軍）を増やす、そうしたら関東軍も進出を諦めるだろうというのが参謀本部の考えでした。本来ならば毅然と「命令」を下すべきところを参謀本部は関東軍を忖度して、組織のバランス

をとるという方法で、支那駐屯軍（日本軍）の地位も格上げし、関東軍と同格にして、増員をすることにしました。

陸軍内部の抗争を中国で行うとはなんと侮辱的なことでしょう。

中国での抗日反日意識は一層高まり、抗日救国運動は激しさを増します。

約4000人の増員部隊は、三大隊に分け、①北京、②天津の従来場所に置き、更に③第三大隊を盧溝橋付近の豊台に兵営を設置して配属しました。その数は1200-1300人で多くは初年兵で未訓練者でしたので豊台付近では毎日のように訓練が行われていました。

(2)、盧溝橋事件の勃発・1937年7月7日の出来事

豊台兵営（大隊長一木清直少佐）の位置は盧溝橋から東へ約6km、盧溝橋は北京の喉元と言われ、中国全土に攻め込むときの戦略的要衝となる位置にあり、ここが日本軍に占領されると満州事変の奉天と同じ運命になると非常な危機感を中国はもっていました。。

支那駐屯軍（日本軍）第三大隊（大隊長一木清直少佐）は第八中隊長（清水節郎大尉）に実戦さながらの夜間演習を命じ（以下の説明は次頁の地図をみながら読んで下さい）清水は竜王廟と大瓦窟の間を演習地として連日連夜演習をしていた。竜王廟には中国軍の第29軍の兵隊がいたが、それを無視するかのように、竜王廟を背にしてその前方の大瓦窟の部落の前に仮設敵（日本軍）を置いて演習を行っていました。

「背後から撃ってください」と言わんばかりに中国側を挑発するような敷設でした。

午後10時30分頃、清水大尉はいったん演習を中止しようとし、それを命令するために伝令を演習に設定した自軍の仮設敵側に派遣した。するとまだ演習だと思った大瓦窟側の仮設敵は、伝令の接近を敵の接近と間違えて2丁の軽機関銃（演習なので空砲）を、西の竜王廟側にいる日本軍に向けて射撃した。

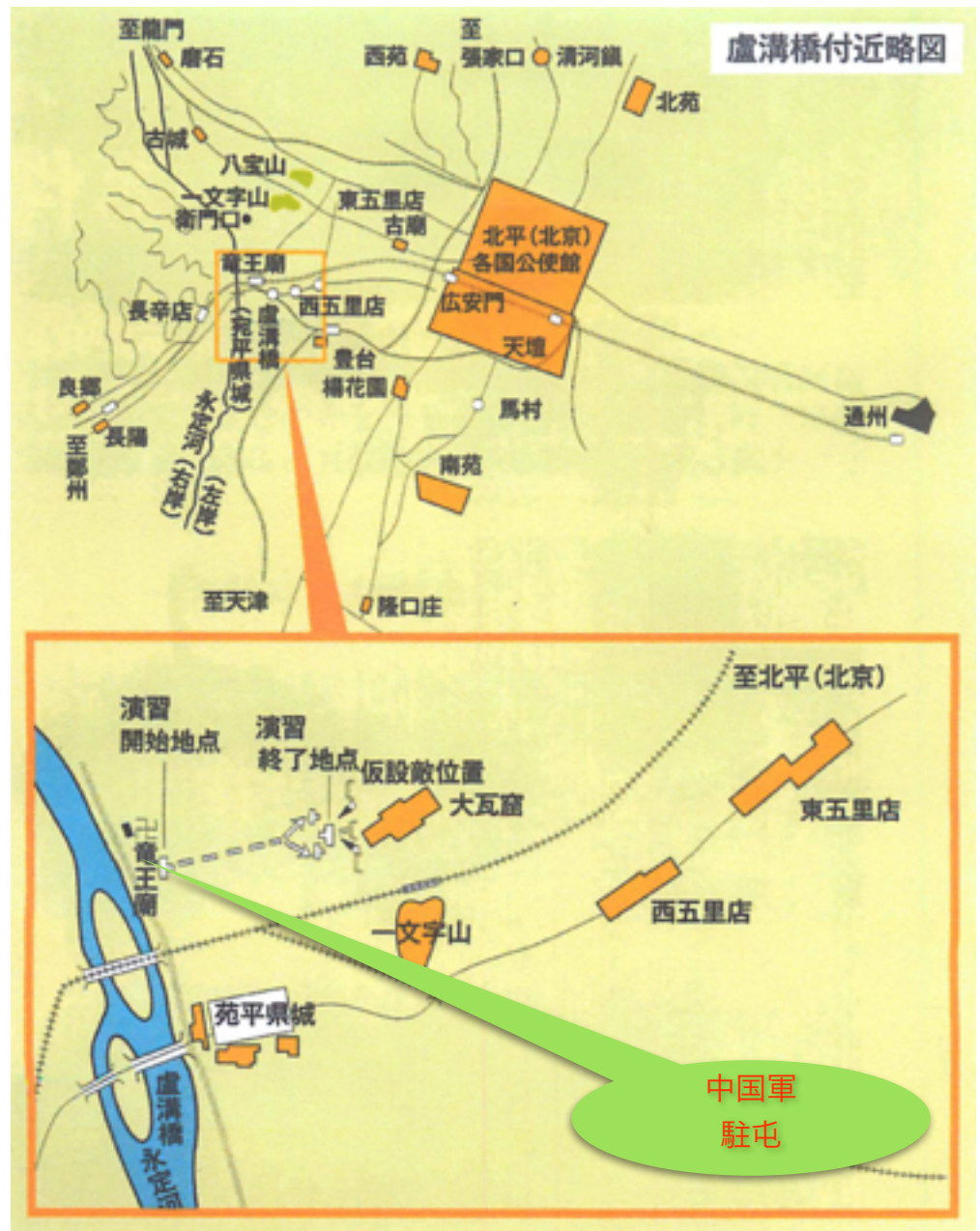
まさにその時、竜王廟の南側（鉄橋寄り）の堤防から3発の銃声が聞こえた。清水大尉は頭上の飛行音から弾丸が実弾で、中国側の不法射撃だと感じ、直ちに部下135名を集合させるために集合ラッパを吹かせた。すると再び堤防の上から10数発の銃声が響き頭上を弾丸の飛行音がかすめた。集合後人員と点呼すると一名が行方不明だった。清水大尉は直ちに豊台兵営に一木大隊長に伝令を走らせ（約6 km）「中国側の不法射撃、兵一名行方不明」と報告させた。不明の兵一名は初年兵で用便のため兵を離れ、迷って竜王廟側の中国兵陣地に近づき発砲され、慌てて自分の隊に20分後に戻った。2回目の10数発はこの兵に対して発砲されたのかもしれない。

（推測）

午後12時少し前

「中国側の不法

射撃、兵一名行方不明」という報告を受けとった一木大隊長は直ちに北京の連隊長・牟田口廉也大佐に報告した。大佐は「兵一名行方不明」という事実を重視し一木大隊長の出動を承認した。8日午前3時主力を終結させたとき3発の銃声が聞こえた。「支那軍が二回までも射撃するは純然たる敵対行為である。断乎戦闘を開始して可なり」と一木大隊長に



命令した。午前5時30分、一斉に攻撃前進を開始し約1時間で中国軍をほぼ全滅させた。

(3)、日本軍中央（東京）の対応

東京の陸軍中央部が事件の報告を受けたのは8日の早朝でした。

近衛首相は「まさか、又、陸軍の計画的行動ではなかろうな」と言い海軍次官であった山本五十六は「陸軍のやつらは何をしでかすか分かったものではない。油断がならんよ」と言っただけに、又しても陸軍の陰謀だと上層部は思ったようです。

閣議が開かれ、拡大派と不拡大派が一致しません。近衛首相は軍の意見に左右され毅然たる態度がとれません。

陸軍大臣は「5000の兵隊を救うため早速3個師団の兵を国内から出した。この件は自分に任せてもらいたい」これに対し近衛首相は「今、日本が大軍を支那に送ることは国際的に重大なことである。陸軍大臣に任すわけにはいかない」この首相の考えは内務大臣、外務大臣及び海軍大臣も賛成し、陸軍大臣は申し出を撤回した。

8日午後6時20分、支那駐屯軍司令部長官に発令した内容は「事件の拡大を防止するため、更に進んで兵力を行使することを避けるべし」であった。

9日再び近衛首相は外相、陸相、海相の4相会議を開き「不拡大方針をとるが、中国が無反省ならば機宜の措置をとる」とし事件解決のための4条件を決定した。①中国軍の盧溝橋からの撤退。②将来責任をもって再発を防止すること。③責任者の処罰④謝罪。陸軍大臣よりの決定

現地で交渉していた今井武夫少佐は双方を調整して

「中国側が日本軍の要求を承認すれば、日本軍は調印と同時に盧溝橋周辺から自発的に撤退する」（条件付き不拡大方針）であった。中国側には屈辱的なものであったが、中国側は盧溝橋を日本に占領されたくなかった。7月11日午後8時に協定に同意し局地解決に向かった。

1937年後半(2)

盧溝橋事件からの陸軍と海軍の動き

(1)、海軍の微妙な動き

7／7，発生、盧溝橋事件勃発に際しての拡大派の先鋒**武藤章大佐**は「愉快的ことが起こったね」と言い、不拡大派の柴山大佐は「厄介なことが起こった」と反応した。

7／8，海軍は即座に「呉鎮守府(駐屯所) 第二特別陸戦隊」を隠密に編制。大隊編制で約500人の2個中隊、佐世保に送る。1ヶ月間市街で訓練しながら待機。

上海到着は8月11日。**海軍のこのスタートダッシュの良さは何を意味するか？**

国内で議論が右往左往する中で

現地で交渉していた今井武夫少佐は双方を調整して

「中国側が日本軍の要求を承認すれば、日本軍は調印と同時に盧溝橋周辺から自発的に撤退する」（条件付き不拡大方針）であった。中国側には屈辱的なものであったが、中国側は盧溝橋を日本に占領されたくなかったので7月11日午後8時に協定に同意し局地解決に向かっていった。

7／10，ところが、一度後退した支那駐屯軍（日本軍）**牟田口連隊長**は10日朝から再び宛平县城に前進を命じた。すると午後4時頃、日本軍に向けて数発の小銃弾がぶち込まれてきた。その報告を受けた牟田口連隊長は「やっぱり敵は、協定を守るつもりはない」と強引に攻撃命令を出した。そこへ上司の河辺旅団長がやってきて、牟田口連隊長を睨み付け、長い睨み合いの末、旅団長は無言で戻った。ここでも既成事実と独断命令が承認された。部隊は命令に従って総攻撃をかけ宛平县城を奪取し、中国軍を完全撃破し、この瞬間が日中戦争の始まりとなった。

7／11，これを追認するかのように11日、不拡大方針を出していた近衛内閣の態度が一変した。

「内地から3個師団、朝鮮から1個師団、満州から2個旅団の派兵を決定し朝鮮と満州の部隊に華北出動を命じる」「重大決意・挙国一致体制」政府声明が出された

7／11、海軍の動き、非常事態に備えるために、木更津航空隊・第12航空隊の2隊を「特設連合航空隊」として編制 **非常事態が起こることを想定済みの体制**

7／12、海軍「対支作戦計画内案」を策定、戦局拡大の場合は「空軍部隊の一斉なる急襲をもってなす。第一第二航空隊をもって杭州を、第一連合航空隊をもって

南昌、南京を空襲す。第二連合航空隊は当初北支方面に使用す。空中攻撃は敵航空勢力の覆滅を目途とす」（要約）既に具体的な戦術が示されている

海軍の方針は、「日中関係の現状を打破するには、蒋介石の中央勢力を屈服させる以外に道はない。局地戦は期間を延ばすだけで、作戦困難となる危険性が大いにある」という内容であった。

7／17、蒋介石は11日の日本の政府声明に対して「吾らはただ徹底的犠牲あるのみ、徹底的抗戦あるのみ。ただ犠牲の決心をもつことによつてのみ初めて最後の勝利を博することができる」と「最後の関頭」を表し国民に忍耐と長期戦の覚悟を訴えた。

7／26、広安門事件が起きる。7／28、通州事件が起きる

7／28、海軍（軍令部と海軍省）は「時局処理及び準備に関する省部協議覚書」を決定

「事態不拡大、局地解決の方針は依然堅持するが、今後の情勢は対支那全面作戦になる機会が大きいので、海軍は対支那全面作戦に対する準備を行うことにする」（要約）

7／30、30日迄に天津が支那駐屯軍（日本陸軍）によって占領され、8月8日に支那駐屯軍（日本陸軍）は北京に入城した。

7／30、陸軍が海軍に作戦地域の制約を伝えたが、海軍は内心せせら笑って「承認」し、天皇に奏上した。天皇も局地解決を望んでいた。
然し海軍を訪れた石原完爾は見抜いていた。「海軍はきっと上海で事を起こす」。

(2)、天皇の動きと船津和平交渉

7／30、天皇は近衛首相に対して「盧溝橋付近（東北地方）を平定すれば、軍事をやめてよろしいのではないか」と意見を述べ、8／5首相に対し、8／6軍令部総長に対し、8／10参謀総長に対し、それぞれ外交交渉による時局収拾を望む意向を伝えている。こうした天皇の意向を受けて4相合意のもとで隠密離に和平工作が行われた。

8／6、「日支国交全般的調整案要綱」が作成された。「盧溝橋事件が発生する原因となった関東軍と支那駐屯軍（日本軍）が強行した華北分離工作によって拡大した權益を大筋において清算し、日本は満州国の維持を最重要の条件とする、日本側の大きな譲歩」（要約）となっていた。

蒋介石も多くの国内問題を抱えていたので和平解決を望んでいた。両国政府が交渉のテーブルに着きうる案であった。

8／7，和平工作の使者には民間人、在華日本紡績同業会総務理事の船津辰一郎が派遣された。成功するかにみえたが、これが成功しては困る組織があった。

海軍である。

前年「南進論」を唱えた海軍は必然的仮想敵国はアメリカであると考え、航空戦で優勢体制をつくり出すために航空機の開発に力を注ぎ九六式の攻撃機や爆撃機が完成していた。それらの飛行機や操縦技術の実戦演習をする必要があった。特に九六式陸上攻撃機は艦上攻撃機より重い爆弾を搭載できるように設計されていた。その効用も実験したかった。南京を始とする中国の都市爆撃でデータを集め零戦闘機の開発に寄与したと言われている。

(3)、大山勇夫第一中隊長事件

8／7，上海海軍特別陸戦隊司令官から秘かに呼び出されていた26歳の青年がいた。大山勇夫第一中隊長であった。口頭秘密命令が言い渡された「お国のために死んでくれ、家族のことは面倒みるから、明後日夕刻、中国軍の飛行基地となっている虹橋飛行場へ強行突入して、射殺されてくれ。その際こちらから攻撃したと見られないように、拳銃は携帯するな」

{密命を受けた大山勇夫中尉の行動}

「夕食をすまして書類整理をしておられました。いらない書類は何時も焼いておけと言われていたのですが、あの日は自分で焼いておられました。終わると浴場に行き、腰上だけ拭っておられました。終わって外に出て手を腰にして空を眺めておられました。そして、自分の室へ帰られ襦袢と褌（ふんどし）をかえられた」（大山の護衛兵を務めた海軍一等兵）

大山は日記を書いていた。8月8日の最後の文章の頁に「遺髪」とお母さんが送った半紙大の絹布で作った千人針が半紙に包まれ挟みこまれており、表に「家人曰く忠義を尽くせ」と書いてあった。千人針はお守りである。お守りが「もう必要なくなりました」との意図が伺われる。

8／8，第一連合航空隊鹿屋航空隊（鹿児島県）は台北基地に移動が命じられる

8／8，木更津海軍航空隊は「渡洋爆撃」準備のため全機大村基地に集合した。

8／9かくして大山勇夫第一中隊長射殺事件が起こる。忠実に命令どおり部下の一等水兵斉藤与藏の運転する車で目的地に突入し射殺された。

8／10、軍令部は、「大山事件対処方針」と「時局処理方策」を決定する。

8／11、海軍は中国側に大山事件の「要求事項」を提出する。

事件責任者の処刑、上海の中国軍防衛陣地の撤去、中国保安隊の縮小と駐屯地の制限等、とうてい中国側がのめない内容を突きつけ、これを受け入れて実行しなければ実力行使をするという上海戦を挑発する最後通牒又は宣戦布告に等しい内容であった

8／12、蒋介石から「承認することは不可能である」と拒否と同時に、戦闘準備の命令を発した

蒋介石の対日戦略は、中国単独では日本に勝利することはできないので「日中戦争を世界戦争へ発展させる」ことであった。それは日本軍を上海・南京を中心とした欧米列強の権益が錯綜する華中に侵攻させ、アメリカやイギリスの武力干渉を引き起こすか、ソ連の対日戦争発動を促すことであった。蒋介石はドイツ軍事顧問団の指導を受けて、上海地域から南京にかけて防衛陣地を構築、日本軍の主力をもっとも防衛態勢と防衛力の強固な上海・南京地域に引き寄せ消耗戦を強いて、日本の速戦速攻作戦を挫折させて長期持久戦に引きずりこむ考えであった。これは海軍の軍備拡大、特に航空兵力の拡充を目論んでいた海軍首脳の思惑と「一致」してしまった。

中国軍の第88師が動きだし、海軍第三艦隊司令長官は陸軍の緊急派遣を要請した。船津辰一郎の和平交渉は一瞬にして吹っ飛んでしまった。

(4)、第2次上海事変の始まり

8／13、上海にて日本の海軍陸戦隊と中国軍第88師との間で戦闘が中国人街ザホクと日本人租界虹口の境界付近で戦闘開始され陸軍を派兵するように緊急要請がなされた。これをもって第2次上海事変が始まった。

海軍木更津航空隊（大村基地に待機・九六式陸上爆撃機）は夜半過ぎ即時待機命令があり、250kgの爆弾2発を積み込み準備を完了した。翌日は台風のため延期、向かう先は南京であった。

8／14、蒋介石は14日未明を期して上海で日本軍を総攻撃を決行するように命じた。ここで中国は全面的な抗日戦に突入するに至った。中国空軍は延べ40機が上海に停泊中の第三艦隊旗艦の「出雲」と上海特別陸戦隊本部へ先制攻撃をしてきた。これに呼応して軍令部は次の海軍声明を発表し攻撃命令を発した。

日本海軍は悪天候の中、計画されていた通り初めての「渡洋爆撃」を開始した。初日は台風のため杭州・広徳・笕橋・喬司を空爆したにとどまった。

「渡洋爆撃」とは日本の航空基地から爆撃機を離陸させて東シナ海上空を飛行して中国の都市を爆撃することである。戦艦からの発進ではない。長距離航続距離が可能で250kgの爆弾を2発搭載出来る破壊力の大きい新鋭機の開発により可能となった。新鋭機を九六陸上攻撃機と名づけ、「海の荒鷲」と言われた。

「九六」とは西暦1936年が大日本帝国皇国2596年であったので下二桁をとって「九六」とした。零戦のゼロは皇国2600年＝西暦1940年に製作されたことを意味する

8／15、午前1時半、近衛首相の政府声明

「支那軍の暴戾を膺懲し、もって南京政府の反省を促すため、今や断乎たる措置をとるのやむなきにいたれり」を発した（近衛第一声明）

「支那暴戾膺懲」が軍部の共通の目的となった。これが目的となる

この日、陸軍は第三師団と第十一師団よりなる上海派遣軍の「編組」した。（編成と言わない）司令官は予備役であった松井石根大將（東京裁判で死刑判決を受ける）当時59歳、大將の数が不足していたための現役復帰である。陸軍最長老の大將の誕生、彼には軍功をあげる最後のチャンスであった。彼の任務は上海戦に限定されていたが、赴任前から南京を攻略するという野心を隠さなかった。

(5)、海軍の渡洋爆撃が始まる。

8／15、南京を爆撃したのは新鋭機は長崎の大村基地を発進して東シナ海を横断し、台風による悪天候であったが南京まで洋上約600kmを含む960kmを4時間で飛翔し、南京を空爆した。上海、南昌、杭州他3地点に及ぶ広範囲なものとなった。

8月の「渡洋爆撃」は延べ78地点内南京は7回、上海は10回、日本軍も出撃で大きな被害をだしている。

ポイントは南京が渡洋爆撃の主たる目標となったことである。空爆は前哨戦であり、続いて陸軍の攻撃が始まる。このことを予想出来た人は多くはなかった。

この日、南京は最初の「渡洋爆撃」を受け市民は混乱した。

被害を受けた南京の金陵大学付属病院である鼓舞病院のウィルソンの記録から

「この日、診療から帰り自家用車の中で、市民が防空壕に逃げ込むのを見て、最初の空襲に気づいた。家に戻った彼は、日本軍機2機が自宅の上空を飛んでいったのを目撃している。午後になっても空襲警報は何度か繰り返し発令され、市民の気持ちを不安にさせた。この日城内にある民間機用の飛行場と城外にある軍用の飛行場の周辺が爆撃され、司法院の建物には飛行機から機銃掃射がくわえられた。このた

め数人の負傷者が出て、彼の勤める大学病院にベッドの空きがあるか問い合わせがきた。中略

8月15日から月末までに23回の南京空襲が行われたが、その多くが夜間空襲であった。夕食後の黄昏時、真夜中の12時、深い眠りに入ろうとする午前2時、更に未明の4時と時間を選ばず来襲する日本軍機の爆撃に南京市民の眠りは奪われた。中略夜間空襲の恐怖は日本軍が毒ガス弾を投下することへの恐れであった。毒ガス弾投下を懸念して、空襲警報の発令とともに窓を閉め切らなければならなかった。南京の夏は内陸気候で蒸し風呂のように暑かった。時には40度を越える熱帯夜でも、空襲警報が解除されるまで、窓を閉めておかなければならなかった。（在留のアメリカ人には防護マスクが配られていた）空爆は連夜続いている（割愛）



8／21、蒋介石は中ソ不可侵条約を調印してソ連と同盟関係を結び、軍機、武器の支援が始まる（カーチスホーク機等）

8／22、中国共産党の紅軍を国民政府の国民革命軍第八路軍に改編、第二次国共合作が成立し、抗日民族統一戦線が成立

(6)、上海で陸上戦闘が始まる

8／23，松井石根大将を司令官とする上海派遣軍の2個師団が上陸に成功するが、上海派遣軍には精鋭を送らないという方針であったので殆どが予備兵（期間は陸軍5年4ヶ月、海軍は4年）と後備役兵（予備兵終了して10年間）であり、兵士としては比較的高年齢者で家族を持ち職業も持ち一般的な家庭生活を営んでいた者を再徴集した軍で編制とは言わず「編組」と呼んだ。戦果は上がりず苦戦が続く

8／31，松井大将は参謀本部に増派を要求せねばならないほど中国軍は強く、堅い要塞がドイツの軍事顧問団によって指導され建造されていた。（石原完爾の予想通りであった）

9／2，日本政府は「北支事変」を「支那事変」と改称する。戦域は中国全土に拡大される。軍備費は増加する。（日華事変ともいう）

9／4，日本海軍は上海市の東郊外の公大飛行場を整備して長さ700㍍幅200㍍の小さな飛行場が完成し、「渡洋爆撃」に代えて戦闘機の護衛をつけた九六陸上戦闘機を発進する本格的な爆撃部隊の出陣が可能となった。

9／7，陸軍、武藤章作戦課長ら拡大派は大部隊の上海派遣を参謀本部に決定させ、華北から後備歩兵10大隊他多数の師団を上海に向かわせた。陸軍参謀本部の作戦の重点も華北から華中へと移行した。（不拡大を主張していた石原完爾は更迭左遷された）増援を得たにもかかわらず戦線はなお膠着し苦戦が続いた。

(7)、国民精神総動員運動の実施 9／11

苦戦と長期化する支那事変に対処するため近衛内閣は本格的な戦時動員体制を目的とし「尽忠報国の精神を振起して」「拳国聖戦に立ち向かう」ために国民に訴えた。政府主催の大演説会に日比谷公会堂に5000人の聴衆が集まった。

三つのスローガン「八紘一宇」「拳国一致」「堅忍持久」、戦争の長期化に対する国民の心構えと社会不満の一掃に努めた。「欲しがりません勝つまでは」「足らぬ足らぬは工夫が足らぬ」「遂げよ聖戦、興せ東亜」「聖戦だ。己を殺して、国を生かせ」「進め一億火の玉だ」「石油の一滴、血の一滴」「全てを戦争へ」が戦時標語となった。翌年の国民総動員法に繋がる。

(8)無差別戦略爆撃を開始 9 / 19

南京の飛行場、政府の建物、中央大学、中央病院、放送局、鉄道駅、水道局、電力発電所、更に新市街の人口密集地も爆撃された。非戦闘員を含む無差別攻撃となった。もっともひどかったのは25日で5回の波状攻撃で爆弾約500個が投下され、市民の死者数百人、負傷者数千人という大被害であった。城壁の北側、長江岸の下関（シャーカン）にあった難民収容所にも爆弾が投下され、100名以上の死者がでた。難民収容所には上海攻略戦のため、住む家を戦場とされた人々が戦火を逃れ、難民となって生活をしていた。上海地域の戦闘が日ごとに激しくなるにつれ南京には一日千人単位の難民の群れがたどり着くようになっていた。そして、同じく千人の単位の難民の群れが南京から移動していった。国立中央の屋上には赤十字のマークと漢字で「中央病院」と書いてあったが攻撃され、20個近くの爆弾が投下され、電気工一人が死亡、職員5人が負傷した。

南京空襲と同じように都市爆撃は10月中旬までに華中・華南の大中小都市60カ所に及んだ。

(10)、トラウトマン和平工作依頼

10 / 1, 戦局が激しくなるなか政府にも早期停戦の動きはあった。首相、外務大臣、陸軍大臣、海軍大臣の4相は「支那事変対処要綱」を決定し停戦条件と国交調整方針を策定した。内容はほぼ船津和平の内容である。時期を見て第三国の公正な和平斡旋を受諾する方針であった。石原完爾は左遷直前であったが某中佐が「今度支那の大使に着任したトラウトマンはベルリンで補佐官をしていた時代の友人である」と言ったのを聞いて「それは願ってもない。すぐに支那に行ってトラウトマンに会い、日支和平工作の手がかりを作ってくれ」と依頼し中佐を支那に行かせた。10月27日広田弘毅外相より米・英・独・仏・伊に対して日支交渉のための第三国の好意的斡旋を受諾する用意のあることを伝えた。トラウトマンはその後熱心な和平工作に尽力した。蒋介石の心も揺れ和平への期待もしていた。然し現場は毎日戦闘が続く（南京空襲の日々は12月12日の南京陥落の日までまる4ヶ月続いた）

10月末になっても勝敗は決しなかった。中国は延べ70余個師、中国軍の3分の1に当たる70万人の兵力を投入した。戦死者は25万人と言われている。日本も19万人大兵力をつぎこみ、戦死傷者43672人に達した。

(11)日本陸軍の増強と中支那方面軍の編合

11／5、日本軍は精鋭部隊である第10軍を杭州湾に上陸させ、上海防衛の中国軍の背後を衝かせた。背後を襲われた中国軍に動揺が走り、撤退と潰走が始まり、やがて総崩れとなった。ここで上海攻略戦は一段落ついた。

11／7、上海派遣軍（4個師団半）と第10軍団（2個師団半）とを合わせて指揮をするために中支那方面軍の「編合」が発令された。司令官松井大將が兼任することとなった。

編合とは仮の編成という意味で、一時的な編成である。（上海派遣軍の時は編組と表現）任務も「上海付近の敵の掃滅」と限定されていた。その理由はこの軍には兵站機関も軍隊の軍紀風紀を取り締まる正式機関としての法務部も無かったからである。然し、ここで注目すべきは参謀副長に武藤章大佐が就任していることである。武藤章大佐（東京裁判で死刑の判決）は松井石根大將と組して南京攻略に向かう独断専行を参謀本部に迫認させることであった。武藤大佐の身分は当時まだ参謀本部にあって出向して参謀副長になっていたのも、参謀本部に無理が言える地位にあった。

{私見}

中支那方面軍の編合という措置は南京陸上戦に備え上海派遣軍を吸収するための手段であり、不拡大派がどんなに反対しても南京攻略が陸軍の目的であったと私は考えます。又海軍による渡洋爆撃が毎日のように行われ華中・華南の主要都市が爆撃を受け、中国の市民に莫大な被害が出ていることも海軍からの報告で知っていた故に、航空機による戦略爆撃の後に陸軍の上陸作戦を加え敵を殲滅するという日本軍全体の統一した目的を完遂するために自信をもって独断専行したものと考えます。陸軍のある部分と海軍のある部分は隠密裏につながっていたように感じます。詳細は次号に山本五十六と航空隊で記す予定です

(12)、上海戦の終末と軍紀の乱れ

11／9、上海戦はほぼ戦闘が終わり中国軍兵士が退去し始めた。上海への最後の「渡洋爆撃」も11／16となっている。日本軍は11月中旬には上海全域を制圧し、上海派遣軍の本来の任務は終わった。心身ともに消耗、疲弊、疲労困憊した兵士たちは本国へ「凱旋」できるはずであった。2度も徴用され戦地に赴いていた兵士の故郷への思いはいかばかりであったでしょう。

陸軍中央には上海派遣軍を帰さねばならない問題を抱えていた。

それは軍紀の著しい退廃、志気の低下、軍紀の弛緩、不法行為の激発が深刻な問題になっていた。軍紀肅正の細部にわたる「注意事項」が各隊に通告されていた。然し、南京への進軍が命じられた

(13)、南京へ進軍が始まる

11／15、第110軍は幕僚会議を開き軍主力をもって独断南京追撃を敢行すると決定した。

これは制令戦を設定して奥地に侵攻することを禁じた軍中央からの命令違反である。

11／15、中国蒋介石は国防最高会議を開き首都の遷都と南京防衛のありかたを検討した。

蒋介石は上海戦を重視して総兵力の3分の1にあたる約70万人の精鋭部隊を投入し戦死者25万人前後という膨大な損失を出した。南京を防衛する困難さを覚悟して、更に長期戦とすることを決定した。蒋介石はトラウトマン和平工作に期待をかけながら、南京城の周囲を2重3重に張り巡らす「複廓陣地」工事を命じ準備に入った。南京外圍陣地を固めるために上海戦から退去中の満身創痍の部隊を緊急移動させた。これだけでは不十分であったので農村から急遽大量の青年壮年者を徴用して新兵として配備した。

11／17、中支那方面軍は進出制令戦線を突破し、上海から総退去する中国軍を追って南京への進撃を開始した。

11／19、中支那方面軍は進出制令線を突破して、総退陣する中国軍を追って南京への進撃を開始した。

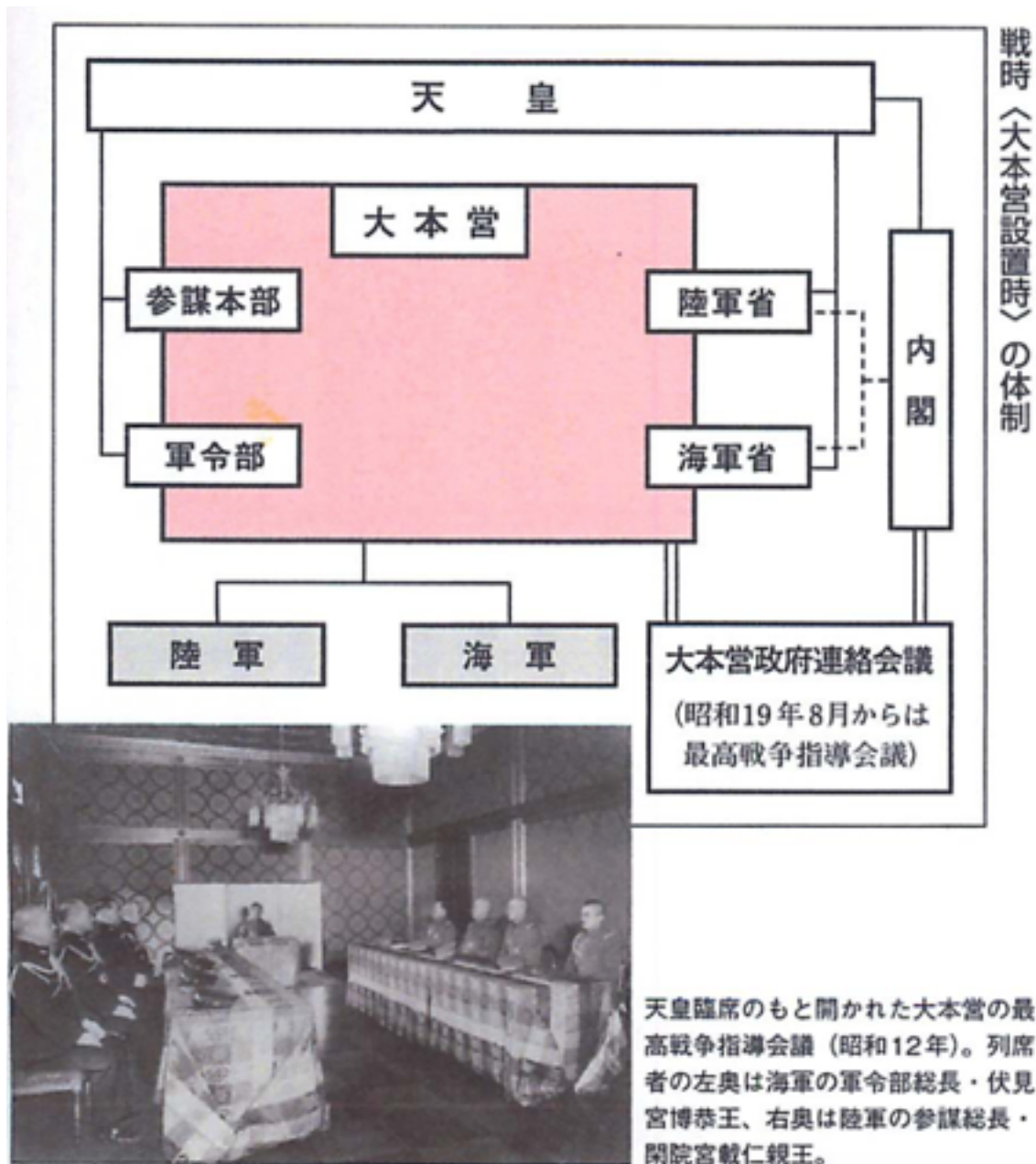
11／20、第10軍から「全力をもって南京に向かって追撃する」と意思表示があったが本部は許可しなかった。

(14)、中国は重慶遷都 日本は大本営を設置

11／20 蒋介石は首都を南京から奥地の重慶へ遷都することを決定。日本の海軍の戦略爆撃が影響を与えたと言われる。長期戦に備える

11／20 日本、大本営を設置＝天皇に直結する最高戦争指導機関、参謀本部、陸軍省、海軍省、の最高首脳が出席した。（大本営構成図参照）

天皇の臨席のもとに参謀本部、陸軍省、海軍省の最高首脳部が出席して第1回大本営御前会議が開かれた。ここでの参謀本部の拡大派下村第一部長から「兵站・輜重・砲兵（の不足）から南京攻略は無理である」との公式見解を公表した後で「方面軍は海軍航空兵力と協力して南京その他の要地を爆撃し、かつ絶えず進撃の氣勢を示



し敵の戦意を消磨せしむることを考えている」と無断発言（上司が反対する意見、下村の本音）がなされた。

対立しているようであった陸軍の拡大派と海軍の拡大派との内密な連携が明らかになり、8月15日より毎日行われている海軍航空隊の爆撃が陸軍の南京等の攻略の前哨戦の意味をもっていることが露呈した。然し批判や反対はされていない。会議の雰囲気では天皇を「その気にする」のが狙いであったかも知れない。会議の後で下村部長は上司から無断発言を叱責されている。軍部の責任逃れと天皇の臨席にはなにがしかの関係があるのが日本の政治の特徴である。

決着が付かない責任をとらないシステムが出来た。

大本営、南京攻略を命ずる

12／1、大本営は「中支那方面軍司令官は、海軍と協同して敵国首都南京を攻略すべし」との命令を下して、中支那方面軍の独断専行を又もや正式に追認した。又正規軍に昇格し上海派遣軍司令官に皇族の朝香宮鳩彦王中將が任命された。松井司令官は兼任を解かれ中支那方面軍の司令官専属となった。但し軍の資質は変わらず兵站機関を持たない軍である

「それは御者が、馬の飼い葉の世話をせず、手綱も握らず、疲れた馬に鞭だけをあびせて暴走させている」のに似ていると言われ南京事件の潜在は備わっていた。

12／2、蒋介石から駐華ドイツ大使トラウトマンに日本側の和平条件を認める意向を伝えてきた。然し、南京陥落間近しという興奮にかられた近衛内閣の閣僚たちは、日本側から要請したにも拘わらずトラウトマン和平工作をないがしろにし始めた（和平工作は10月から始まっていた）

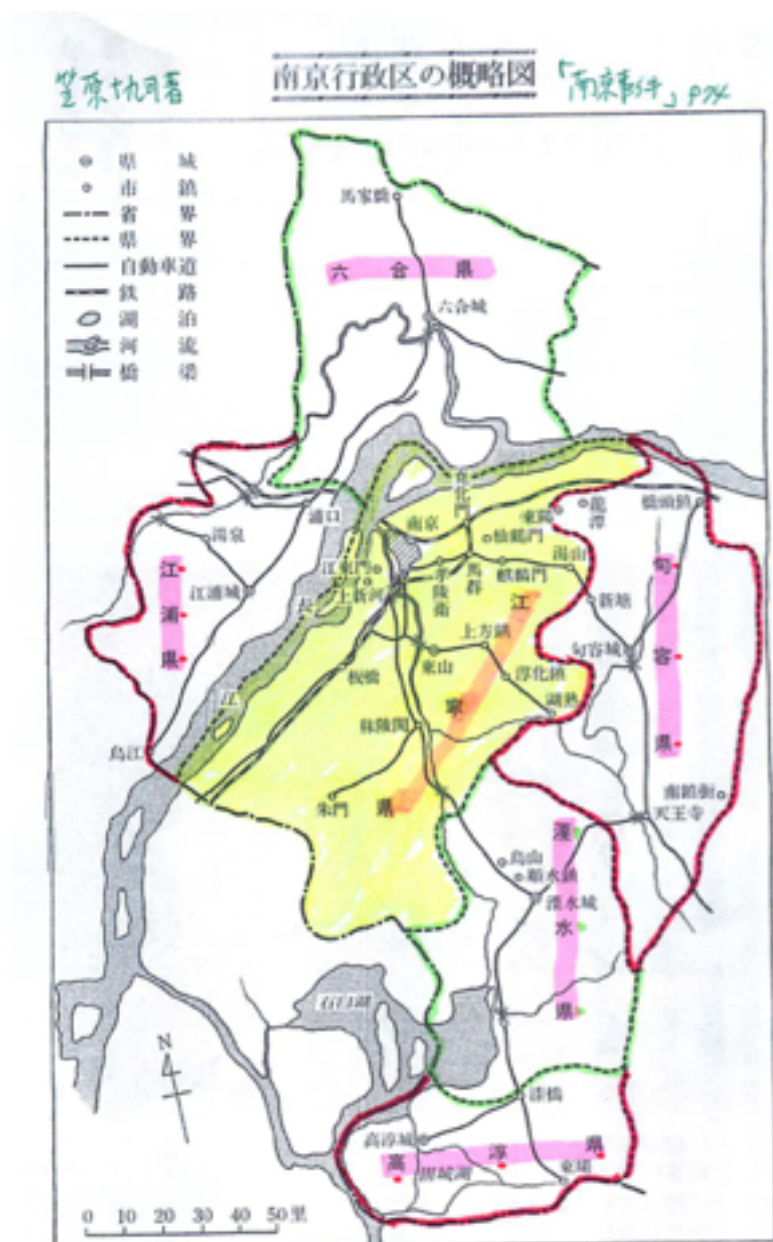
12／4、北京で中華民国臨時政府（日本の傀儡政府）が樹立された。華北では関東軍が華北5省を手中に治めていた

南京特別市と南京城内の概要

攻略の対象となった南京特別市は南京城内とその周辺の地域6県（南京外圍防禦陣地線）からなっていた。その面積は日本の東京都と埼玉県と神奈川県を合わせた広さである。

（次頁地図参照）

南京城内の面積は東京の山手線内の広さである。全長



資料編『日中戦争 南京大殲滅事件資料集2 英文資料編』による。

34kmの城壁で16の門をもつ高さ20mの堅固な城壁は現在もほぼ原型を留めている
南京事件は南京城外周辺地域から始まっているが事件の終結迄は次の段階に分けられる（私見＝本稿のまとめ方）

- (1)周辺6県から始まって南京城内に入るまで近郊農村部で起こった事件
- (2)南京城に入って12月17日松井大将の入場式まで南京城内外で起こった事件
- (3)12月18日から終結までの事件

南京攻撃は8月15日の海軍の「渡洋爆撃」で既に始まっており「戦略爆撃理論」が実証されている。「空軍で攻撃し、地上で攻略する。空軍は先制奇襲で敵の航空兵力と施設（格納庫）を破壊、次に制空権を奪い、戦略爆撃を連続敢行し、敵の戦意を消磨させて、最後に陸から全面攻撃をかけ攻略・占拠するという段階を追った戦略をとった。

(1)、周辺6県から始まって南京城内に入るまで 近郊農村部で起こった事件

大本營の正式命令が出る前（12月1日）独断専行で攻めた地域は句容県であった。ここは有名な倪塘村があるところ（12月4日事件）だが既に11/22から被害が出ている。南京へは17日に日本軍が向かっている（既述のとおり）

以下は日本の歩兵第20連隊の牧原信夫上等兵の陣中日記からごく一部を引用

11/22、道路上には支那兵の死体、民衆及び婦人の死体が見るのも辛い様子であった。橋の付近には5-6個の支那軍の死体が焼かれたり、首をはねられて倒れている。話しでは砲兵隊の将校がためし切りをやったそうである。

11/27、休憩中に家に隠れていた敗残兵を殴り殺す。支那人2名を連れて11時、出発す――休憩中に5-6軒の藁葺きの家を焼いた。炎は天高く燃え上がり、気持ちがいそいそした。

11/29、武進は抗日、排日の根拠地であるため全町掃討し、老若男女を問わず全員銃殺す。

日記は続くが気分が悪くなるのでここまでとする。

この日記は検閲を覚悟で書かれているので、加害者の都合で書かれている。

おそらくこの筆者は11/17に上海を出発した上海派遣軍の一人であると推定する。

南京近郊の6県には150万人の人が住んでいた。南京攻略が始まってでも避難するところもなく、前触れも無く波状的に侵攻してくる日本軍に苦しめられた。日本軍は兵站機関を持たないので糧食を現地調達＝食糧挑発と略奪が日常的になっていた。。

11／29、溧水に中国軍総司令部があるという情報を得て、海軍航空隊の戦闘機・爆撃機36機が市街を爆撃、突然の空襲で街は地獄絵と化した。市民1200余名が死亡家屋数千軒が破壊された。海軍の航空隊は陸軍の第10軍及び上海派遣軍の陸上作戦に協力して、南京への途上にある常州、丹陽、鎮江などの無防備都市の市街を爆撃したり、敗走する中国軍密集部隊への機銃掃射、撤退部隊を乗せたジャンク群の爆撃、駅や貨車や鉄道などの輸送交通手段の爆撃・破壊など、さまざまな作戦を展開した（海軍の陸上戦闘協力）

12／3、海軍航空隊は南京の東南130kmの常州に前進基地を開設、多くの飛行機を移駐させた。空爆が更に容易にできるようになった。

12／4、句容県の倪塘村（南京から約50km）に日本軍第16師団が侵攻、翌朝にかけて殺・略・姦のあらゆる暴力がなされた。

12／6 前線部隊は南京城「複廓陣地」（中国軍が2重3重に防衛している城壁近く）に向かった進撃を開始。

海軍は12／3に常州（南京と上海の中間、南京から約150km）に前進基地を完成し多くの戦闘機を終結して、連日南京城内に爆撃を加えた。

蒋介石の脱出

12／6、蒋介石は部下の勧めで南京を脱出、後の指揮を唐生智司令官に委ねた。数日中に国民政府の軍政の要人、南京市長を始とする南京市政府の要人もすべて南京を脱出した。

(2)、南京城に入って12月17日松井大将の入場式まで 南京城内外で起こった事件

南京城内入場直前

①日本側の対応

蒋介石の脱出は敗北を示すものであった。日本軍は南京陥落も目前と考えて中支那方面軍司令部は「南京城の攻略及び入城に関する注意事項」を下達した。

内容は、城内には一部の軍紀厳正な選抜された部隊だけを入れることが明記されていた。この注意事項が守られていれば南京事件は起こらなかったはずである。

「皇軍が外国の首都に入城するのは有史以来の盛事であり、長く歴史に残る事績であり、世界がひとしく注目している大事件であることを鑑み、清々堂々、将来の模範たるべき心構えを持って入り、各部隊の乱入、友軍の相撃、不法行為等など絶対にあってはならない」「入城部隊は師団長が特に選抜した者、あらかじめ注意事項、特に城内外国人権益の位置等を徹底せしめ、絶対に過誤なきを期す。」

12／7、ところが12／7日現地着任した朝香宮鳩彦王中将上海派遣軍司令官は「たとえ中支那方面軍よりなんといわれるとも————南京攻撃の統制線のごときを墨守するに及ばず」と断言。「注意事項」は空文化してしまった。朝香宮鳩彦王中将は12／1日任命されたばかりで現地の実情を全く知らずして、自分の権限を犯されたと感情的になった判断を下した。その結果は歴史に長く著しい汚点として刻まれることになる。一人の非常識な判断、役割をわきまえない不思議がどんなに大きな影響を後世に遺すかを見事に知らしめるものである。この朝香宮鳩彦王中将を説得する者がいなかったことも（中間管理職不在）不幸なことであつた。

②中国側の対応

行き詰まっている中国軍は伝統的な「清野作戦」を挙行した。侵攻してくる日本軍の遮蔽物に使われる可能性のある建物をすべて焼却してしまうという焼野原作戦である。7日から9日にかけて中国軍は南京城壁の周囲1～2kmにある居住区域全域と南京城から半径16km以内にある道路沿いの村落と民家を強制的に焼き払った。住む家を失った近郊農民と城郭沿いに住んでいた市民が、城内の「南京安全区」（後述）に殺到した。これが不幸を増加させることになる。

この清野作戦は食糧を略奪し民家に宿営する日本軍が城外に留まることを困難にしまった。「注意事項」を守ることが出来ず、数万の飢えたる日本軍が城内駐屯せざるを得なくした。

南京城最後の攻略戦

12／8、日本軍は南京城の包囲を完了

12／9、松井石根（大日本陸軍総司令官）の名前で「投降勧告文」を日本軍機から城内へ投下、中国軍返答無し

12／10、中国軍、唐生智（南京防衛軍司令長官）は「死守の尽力せよ。陣地放棄は厳罰に処す。長江の渡江を厳禁」という南京城と生死をともにする厳命をだし

た。日本陸軍は「南京城の攻略を続行し城内を掃蕩すべし」との南京城総攻撃を命令。海軍は海軍航空隊の爆撃を一段と激化した。激戦は12日迄続くのであるが日本国内では「南京陥落の捷報（良い知らせ）に祝賀の万歳わわき起こり、提灯行列がくりだされた。このラ

（地図説明 ピンク線は城壁 黄色は国際委員安全区）

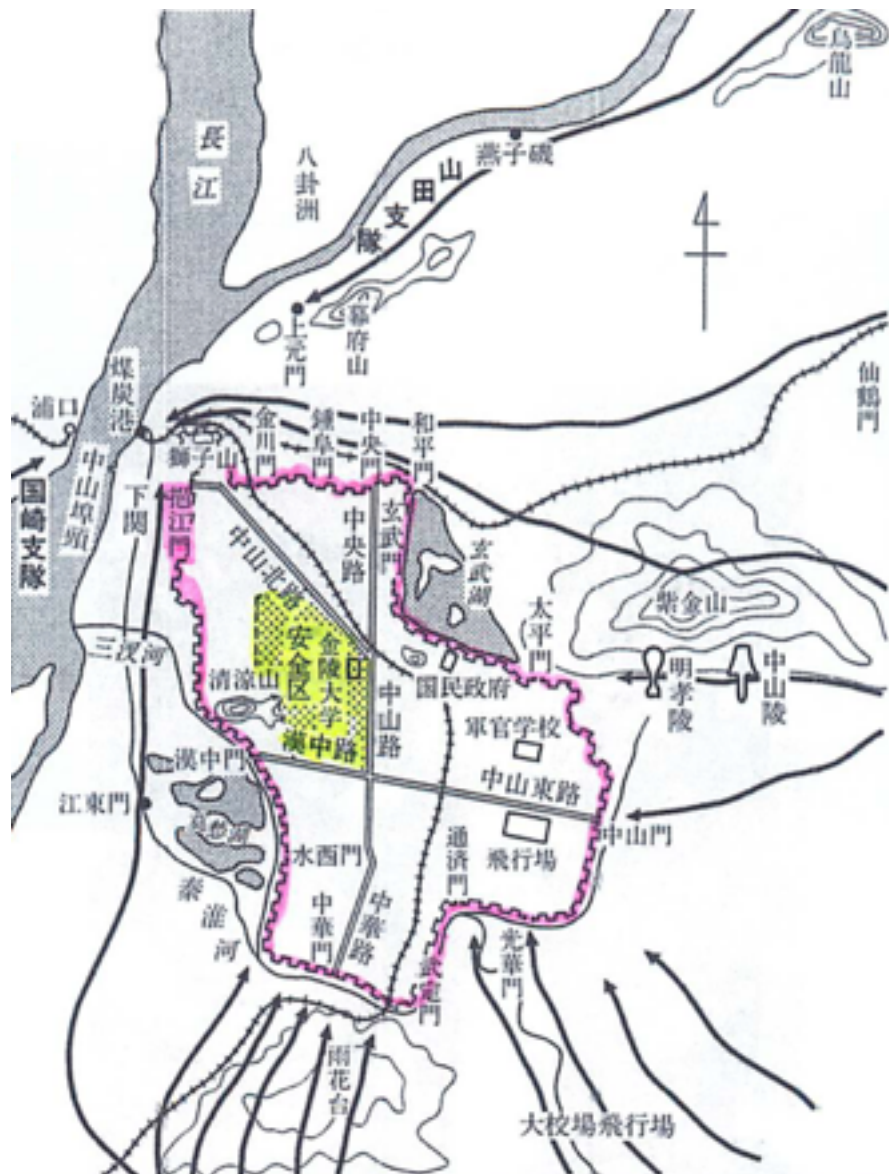
ジオ・ニュースが現地に流れた頃12／11午後第6師団は南京城壁西側の湿

地で小隊長2人を戦死させるほどの苦戦をしていた。このニュースを聞いて「誰がこんなデマを流すのか」と現地では不審があったが、現地の上層部（松井・武藤ライン）は国民の支持を取り付けること、反響が現場兵士を鼓舞することを狙って近い予想を発信していた。（現場記者の報道競争もあったが、報道規制のもとで自由に真実な報道はできなかった。

「感激の10日、脇坂部隊誉れの一番乗り」と報じられた脇坂隊は南京城にたどり着いただけであり、その後は中国軍に逆に包囲され集中攻撃に遭い全滅に近い損失を出して、耐えていた。

故意の誤報は国民を踊らせ「提灯行列」「宮城前パレード」で兵士達を鼓舞したのである

予想通り、海軍航空隊の激しい爆撃も加わり、唐生智（南京防衛軍司令長官）が城内脱出を果たした



地

12/12、深夜、中支那方面軍は南京城を陥落させ、13日朝からは「残敵掃蕩」を開始した。この「残敵掃蕩」は「城内外の敵をあらゆる手段を用いて殲滅する。（暴支膺懲）」という命令で「注意事項」は無視された。

「南京難民区（安全区）国際委員会」（後述）を設立したラーベはこの様子を次のように記している。

「彼ら日本軍部隊は、脱走した囚人の群れの様に見えた」

彼らは南京にいたる進撃途中、沿道の村落を襲撃し、村民を殺害、女性を強姦・輪姦そして殺害し、食糧を略奪し、最後には放火するという残虐な行為を積み重ねてきた、中国軍憎しの敵愾心と狂気の戦場心理をもって残敵掃蕩にあたった。その斬殺の残忍さはここでは割愛する

パナイ号事件 12/12、長江上流

この日の午前、中支那方面軍司令部から常州基地にいた海軍第二連合航空隊の司令部に電話がかかった「南京上流約18kmの揚子江上に中国の敗残兵を満載した商船約10隻が上流に向かって逃走中である。陸軍にはこの敵を攻撃する手段がないので、是非とも海軍航空部隊で攻撃してもらいたい。もしこの攻撃に成功するなら陸軍では感状に値することだ」この知らせで発進した指揮官は村田重治大尉で九六式艦上攻撃機3機（各機60kg爆弾6個搭載）ほか3名の指揮官で計24機であった。空は快晴で視界は50kmほどあり、地上はあまり風がないという気象状況であった。

アメリカの砲艦パナイ号はこの日の正午には日本軍の砲弾を避けて南京の上流約45kmの地点の長江の中州付近に投錨、停泊していた。パナイ号にはアメリカ大使館が臨時に置かれていた。パナイ号が警護していたのはアメリカのスタンダード石油会社の商船とタンカーの美平号、美峡号、美安号で全ての船は大型サイズのアメリカ国旗を幾つも掲げていた。この船団を目がけて4名の指揮官麾下からなる24機が順番に爆撃をしてパナイ号は沈没、タンカーの美平号のドラム缶は爆発してその後何時間にもわたって爆発音がつづいた。（極めて徹底した念入りの攻撃であった）

この詳細な経緯はアメリカ政府と国民に大きな衝撃を与え、対日感情は更に悪化することになった。アメリカではこの事件を「真珠湾攻撃への序曲」と称している。日本側は誤射であると陳謝し賠償に応じたが、アメリカ側は誤射とは納得していない。その後の日米関係に与えた影響は大きく、この事件は日本海軍がアメリカ海軍に敵対したととらえられ、南京虐殺事件と合わせて対日感情を悪化させたばかりでなく、日本軍の残虐的行為に対するアメリカ国民の憤りが高まり、抗日・中国への支援活動が開始された。アメリカ国民の日本商品ボイコット運動が拡大するに伴い、それは対日経済制裁の要求にまで発展した。

アメリカ政府は日本の現地軍の独断専行や海軍航空隊の中国都市爆撃等を統制出来ない日本政府と軍部中央の指導力に対して不信と危機感を抱き「再び不意打ち」「奇

襲攻撃」が行われる可能性を警戒して、アメリカ海軍航空兵力の軍備拡張政策を推進することになった。

村田重治大尉はアメリカ向けに形式的は譴責処分とされたが実際は功績が評価され出世街道を進み「雷撃王」と賞賛され、真珠湾攻撃で「われ、敵主力を雷撃す。効果甚大」と真っ先に入電した指揮官で山本五十六司令官長より感状を授与されている。

日本国内では祝賀に踊る

12／14、日本国内では、南京陥落祝賀の大提灯行列、帝都旗、旗、旗の波」40万の市民が、マスコミの力で踊らされ、勝戦を煽らされていた。天皇は「お言葉」を下賜された。

「陸軍海軍幕僚長に賜りたる大元帥陛下御言葉

中支那方面の陸海軍諸部隊が上海付近の作戦に引き続き勇猛果敢なる追撃をおこない、首都南京を陥れたことは深く満足に思う。この旨將兵に申し伝えよ」

天皇は戦争の拡大には何度も反対してきたにもかかわらず、命令違反の連続と統制無視で戦線を拡大してきた侵略行為を讃えたのは何故なのだろうか？一度ならずも。

城内外残敵掃討の激化

入場式（松井石根司令官の厳命）のために更に厳しい「残敵大掃蕩」が命じられた。14日から17日にかけての、南京城内外で全軍あげての徹底した「残敵掃蕩・殲滅」作戦が遂行された。南京城区だけでなく再び近郊農村にまで苛酷な作戦が展開された。兵士と怪しまれたものは市民も殲滅された。若い男子の殆どが狩り出されて、靴づれのある者、頭に帽子の線跡がある者、極めて姿勢のよい者、背中に背囊の跡のある者、目つきの鋭い者は射殺された。その多くは軍に関係のないものであった。日本軍の発表で3日間で15000人を逮捕したがまだ25000人が市内に潜んでいると強調した。日本軍の捜査は虱潰しで「便衣兵容疑者」（民間人の平服を着て銃を保持するゲリラ戦闘員）の搜索をしたので嫌疑のかかった一般市民も摘発され射殺された。

難民区に及んだ残敵掃蕩

①「南京難民区（安全区）国際委員会」が設立

11／17、「日本軍が南京に近づいて来る前に、城外に避難できない貧しい家の女性や子ども、その他の市民たちにとって安全と思える場所（安全センター又は安全区域）を設けたい」と提案したのはアメリカの宣教師ミニ・ヴォートリン女史であった。彼女の提案に賛同して南京に留まる事を決意したアメリカ人宣教師、教授、ドイツ人商社マン、デンマーク人、、イギリス人ら外国人15名によって「南

京難民区（安全区）国際委員会」が設立された。委員長になったのはドイツ人ジョン・H・Dラーベである。「ドイツ人なら日本当局とうまく交渉ができる可能性がある」と思われたからだ。アメリカ大使館を通して日本と中国に通告した。前掲地図の通り南京城内の約8分の1、面積8.6km²キロ、東京都の中央区よりやや狭い面積に相当する

12月1日より、空襲が続く中難民受け入れの準備に奔走した。

②難民区に避難した人々

8日から難民収容が始まった。

たちまち数万人の難民が収容された。上海の戦域から避難してきた人々、無錫や常州、句容県などの外圍戦線から、進撃する日本軍に追い払われるようにして逃げ延びて来た難民、そして、中国軍による「清野作戦」で家を焼き払われた農民と市民達であった。最高時には約25万人が避難してきた。12日夜から中国の南京防衛軍の崩壊により撤退する機会を失った敗残兵が武器を捨てて、軍服を脱いで逃げ込んできた。

③難民区の掃蕩

12月14日日本軍は難民区一帯を風潰しに敗残兵狩りをおこなった。「今日こそは草の根を分けても探し出し、亡き戦友の恨みを晴らしてやろうと意気こんで配置についた」日本軍の見積もりでは少なくとも5000～6000人と判断されていた。「片っ端から引っ張り出し裸にして持ち物を検査して、道路へ垂れ下がっている電線で引きくくり数珠つなぎにした」部屋に入れて焼き殺したり、銃殺した。（集団処刑）入場式を翌日に控えた16日になると難民区周辺における「敗残兵狩り」は一層苛酷になった。民家に一軒一軒侵入し、徹底的に捜査し、隠れていた婦女子を発見すると強姦・輪姦行為をなし、証拠隠滅のため殺害した。この事件から自宅にいて恐怖にかられた婦人が何百人と街頭に逃げ出し安全な場所を求めて彷徨した。婦女子だけを収容した金陵女子文理学院のキャンパスは既に1万人近い難民で、渡り廊下まであふれて、足の踏み場もないほどにふくれあがっていた。開設責任者のミニ・ヴォートリン女史は、これらの女性を引き連れ金陵大学寮に保護した。

17日には1000件を超える強姦事件が発生したため、18日ミニ・ヴォートリン女史は再び500人を金陵大学寮にいたが彼女達の寝る場所はなく露天で一夜を過ごした。発見された敗残兵の虐殺の仕方はここでは割愛する。

残酷である。日本側の担当某大佐の日記には「3日間で約6500を嚴重処分す」と記されている。殺戮されたのは過半が一般市民だったとラーベは実相を記し遺している。

長江沿岸の残敵処分

敗残兵狩りは城内だけではなく長江沿岸から近郊農村にもなされている。

近郊農村6県は3度目の日本軍の来襲である。

16日「捕虜総数17025名、夕刻より軍命令により、捕虜の3分の1を江岸に引き出し射殺す。――中略――」別の部隊の日記では「三日前捕虜せし支那兵の一部5000名を揚子江の沿岸に連れ出し機関銃をもって射殺す。その後銃剣にて思う存分に突き刺す――」

揚子江担当の部隊は17日入場式の日も捕虜の始末で18日の日記「昨夜まで殺した捕虜は約2万人、揚子江の二カ所に山のように重なっているそうだ。7時だが未だ片付け隊は帰ってこない。12月19日午前7時半整列にて清掃作業に行く。揚子江の現場に行き、折り重なる幾百の死骸に驚く。石油をかけ焼いたため悪臭はなはだし、――」二日間で揚子江に投げ捨てられた死体は約2万人であった。

(3)12月18日から終結までの事件

南京入場式後に起きたこと

「未曾有の盛事・未曾有の惨事」

12月17日午後1時半、定刻、南京入場式が開始された。この式典には南京攻略戦に参加した全戦闘部隊の3分の1が代表部隊として入城した。残りは敗残兵狩り又は休養であった。（10日間の休養・慰労期間が与えられた部隊も数多くあった）

この日には祝い酒が振る舞われた。列席出来なかった各部隊でも市内で徴発した酒類で乾杯して、それぞれの部隊でそれぞれの方式で祝宴がもたれた。

この日の模様をイギリス人記者は

「12月17日、金曜日。略奪・殺人・強姦はおとろえる様子もなく続き、ざっと計算しても、昨夜から今日の昼にかけて1000人の婦人が強姦され、ある気の毒な婦人は37回も強姦された。別の婦人は5ヶ月の赤ん坊を故意に窒息死させられ、野獣のような男が、彼女を強姦した。まるでホラーの夢でも見ているようだが、目が覚めるとそれが現実だった」と記している。

入場式前後から激増した強姦事件は1日1000件以上も発生し、最初の一週間で8000件以上の女性が犠牲になった。日本兵は金陵大学寮の女性も病院の看護婦も侵入し強姦した。神学院では白昼17名の兵士が一人の女性を輪姦した。年齢は少女から72歳と76歳になる老婆も含まれていた。10日間の休養期間には戦闘と全く関係のない、膨大な女性の身体と生命が犠牲にされた。ラーベは2万件とみているが、それも南京難民区国際委員会が掌握した事例だけである。難民区以外の更に広大な城外近郊区でおこなわれ多くの婦女子陵辱行為は記録も証言もする者もなく、歴史の闇にほおむりさられた。（数は計り知れない）

1938年（昭和13年）

南京自治委員会を設立

1938／1／1

上海派遣軍の肝いりで、傀儡組織の南京自治委員会の発表式が挙行された。

南京の日本軍には正月三日間の休暇が与えられ、難民区国際委員たちの背筋に再び鋭い恐怖の寒気が走った。。難民区の新年は強姦で始まった。委員達の格闘の日々が綴られて残っている。（割愛）

1／15、大本営政府連絡会議において、国民政府との和平交渉（トラウトマン和平工作）の最終打ち切りを決定した。参謀本部はトラウトマン和平交渉を妥結させ、これ以上の拡大をしないで戦争終結を主張したが、近衛内閣、陸軍省、海軍省の反対多数で蒋介石国民政府を否定することになった。

帝国政府は爾後国民政府を対手（あいて）とせず

1／16、近衛首相が「帝国政府は爾後国民政府を対手（あいて）とせず」という蒋介石国民政府を否定する政府声明を発表した。これは中国が屈服するまで戦争を拡大・継続していくという決定である。（近衛第二声明）

1／18、近衛首相は「帝国政府は爾後国民政府を対手（あいて）とせず」というのは同政府の否認よりも強いものである。これを抹殺せんとするものである」と補足的声明を出した。この政府と軍中央の決定は、日本国民を長期日中戦争の泥沼に引きずり込んでいく決定的な契機となった

1／22、第16師団が華北へ移動となった。代わって第11師団が進駐した。

アリソン事件発生 1／24、再び対米事件

武装した日本兵が難民キャンプに侵入し、一人の女性を拉致、彼らが占拠して宿泊しているアメリカ人邸宅に連行して強姦した。二日後にアメリカ大使館員アリソンが、日本の領事館警察と憲兵の同行のもと、被害女性をともなって現場に調査に行ったところ、中から出てきた日本軍将校がアリソンに平手打ちをくわせるという事件を起こした。おそらく将校達はアメリカ人の記事発信に恨みを持っていたのであろう。アメリカでは外交官侮辱事件として大々的に報道された。日本政府はすぐに謝罪して賠償し、外交決着を付けたがアメリカ市民の日本への不信を収める事ができなかった。（パナイ号事件に続く対米敵視事件となった）

南京難民区（安全区）国際委員会の解散を要求

2月上旬、日本軍第11師団は南京の秩序が回復し、平常の市民活動が戻ったことを内外に印象づけるため難民区の閉鎖を命じた。難民区を追い立てられ自宅に戻った難民の女性を待っていたかのように、日本兵による強姦事件が続発し、日に100件にもものぼる凄まじいものであった。強姦を拒否して刺殺された少女、強姦されている母親の傍らで泣き止まなかった幼児の口に布を入れて窒息死させる殺人行為。

2／14、大本営は中支那方面軍・上海派遣軍・第10軍の戦闘序列を解き、新たに中支那派遣軍の戦闘序列を下令した。司令官・畑俊六、参謀副長に武藤章が留任。

この留任はポイント

南京攻略戦は終結したが、その後も強姦を中心とする日本軍の残虐行為は続いた。

2／18、南京安全区国際委員会は難民区を解消したいという日本当局の要請をうけて、名称を「南京国際救済委員会」に変更した。

3月に入ると南京城内における残虐行為は少なくなったが、近郊農村は依然として危険な状態が続いていた。2月中旬、アメリカ人宣教師が管理する難民キャンプ（郊外にあり1万人収容していた）の周辺では敗残兵狩りで男子は殺害され、女性は陵辱の被害が頻繁に発生した、金陵女子文理学院には3月に入って、南京難民区（この時の正確な名称は「南京国際救済委員会」）の話しを聞き知った農村の女性が500人余避難してきた。同じく500人余の男子が金陵大学寮に避難してきた。いったん減少していた金陵女子文理学院と金城大学キャンパスの避難民の数は3310名に増えた。

金陵大学付属病院である鼓楼病院（院長ウィルソン、彼も南京に留まって治療を続けた人）のもとには、新たに不幸な犠牲者が入院してきた。それは、南京城内の難民や住民の近くに長期駐屯した日本軍が婦女子を炊事婦・洗濯婦として拉致し、軟禁状態にして連日強姦・輪姦された人で悪性の病気をうつされ発病し放免された女性達であった。日本兵宿舎に拉致され8日間にわたり毎日7回から10回強姦されあらゆる種類の病気をうつされ放免された女性らがいた。中には28日間拉致拘留され毎日10回から20回の割合で強姦され病気になった人もやってきた。そして、更なる不幸は長期にわたって何回も犯されたため、妊娠してしまった女性も多かった。強姦された女性の10人に一人は妊娠していた。彼女たちは自殺の道を選ぶ者も少なくなかった。生まれた子どもは例外なく溺死や窒息死となった。ハーフが育てられることはなかった。

中華民国維新政府の成立（傀儡政府）

3／28、中支那派遣軍の工作による中華民国維新政府が南京に成立した（南京自治委員会は解散）治安もほぼ回復し、安全区の難民も自宅に戻り始めた。ここにおいて南京事件は一応終焉した。

要約

南京大虐殺事件は日本の陸軍と海軍が南京攻略と占領を通じて中国の軍人及び民間人に対して行った戦時国際法と国際人道法に反した不法残虐行為の総体である。

事件の区域は南京城内のみならず近郊6県を含む南京特別市全域を含む地域で行われた。

時期1937年8月15日から開始された海軍機の無差別空爆撃が前哨線であり、陸軍の中支那方面軍が南京特別視に突入した1937年11月4月中旬から地上戦で本格化し翌年3月28日中華民国維新政府の成立時と考えられる。

南京攻略戦は先ず海軍航空部隊が4ヶ月にわたる南京空爆作戦を実施し、空からの攻撃により中国政府側の物質的・精神的抵抗力を破壊し、「敵の戦意を消滅」させて、最後に地上から陸上部隊が侵攻、南京城内に突入、占領するという、世界における戦略爆撃の初期の理論を本格的に実施したものである。

本稿では関東軍の活動は記すことができなかったが1937年12月31日現在の日本軍の侵攻戦況状況は次の通りである

①内蒙古の東南部

察哈爾省の南部と綏遠省の大部分を占拠した。

②華北

河北省、山西省北部、山東省及び河南省の黄河以北の要地の殆どを占拠した。

11/27、河南省の彰徳に「河南自治政府」を創設した

12/11、山西省の太原に「山西自治政府」を創設した

河北省の南部と山東省の北部に「治安維持会」を設立した。

12/14、北京で「中華民国臨時政府」の樹立を宣言させた。

③華中・華南は、ごく一部であるが本稿の通り

おわりに（私見）

ここまで纏めるのに随分苦労しましたが、ここで特に考えさせられることは、日本は「戦争をやめることができなかった」二度のチャンスを生かすことが出来なかったという事実です。

本稿は「それでも日本人は戦争を選んだ」（加藤陽子著）を理解するために始めた試みですが「人々は何故戦争をするのか？」という原初的な疑問を追うようになりました。

「組織人としてそうせざるを得なかった」に結びつく組織責任転嫁論と「責任を執らない個人」の影響力の大きさ、特に指導者の影響力の大きさは、今も変わらず私たちの身近で起こっています。私たちの日常では、国家や会社組織の中で個人の無力さを感じますが、「否と然り」を明確にすることの大切さを痛感します。

本稿から感じるのですが、陸軍は早期停戦を基本的に考えていたと思われます。それには石原完爾の考えが影響しています。満州事変では拡大派の先鋒であった彼がその失敗を自認し学び直したのでしょう。一転不拡大になったのは「ソ連への脅威」でした。又彼は日本は最終戦をアメリカと戦うと分析していましたから、海軍の山本五十六にも大きな影響を与えたと私は考えています。山本五十六はその考えを基に航空機の開発に注力します。海軍は上海・南京戦を開発した飛行機と操縦技術の検証のために利用しました。それ故いかなる和平工作に消極的でしたアメリカに留学経験のある山本五十六はアメリカの豊富な資源と戦力を見てどのようにすれば日本が勝てるかを真剣に考えたと思います。負けることを知りながら止めることが出来なかったのは何故だろうかという疑問があります。次回はこのことも記す予定です。

本稿ではマスコミの持つ影響力については殆ど触れることが出来ませんでした。言論統制は「故意の誤報」で国民を踊らせたとの程度にとどまりましたが、言論の自由は民主主義の基本です。

海軍はこの上海～南京戦で何故繰り返し対米敵視事件を引き起こしたのでしょうか

陸軍、海軍のみならず国民に共通していたのは中国への侮辱感をともなった蔑視であったと思います。これは日清戦争の頃から養われたものです。

「暴支膺懲」が戦争の目的になるのですから、国民感情としては「恨みをはらす為に懲らしめる」ことになってしまいます。戦場に出る兵士には皇軍教育がなされるので、更にその考えは強化され、戦地で同胞が殺されるのを直視すれば、益々その感情は高まります。教育の大切さが思い知らされます。

日本も中国もこれだけの犠牲を払っても戦争を止めることが出来ませんでした。中国には毛沢東の戦略があつてソ連のみならず英米を味方に付けることで勝戦の機会を待っていました。資源の乏しい日本は、外交交

渉によらず、戦争で資源国を勝ち取ることを目指して進軍していくわけです。結論の分かっている歴史研究ですがリーダーシップの観点や組織論の観点からも多くの学びが得られます。そして、人間についての深い洞察が可能になるように思い、学びを続けます。

引用参考文献

山中 恒著	「アジア・太平洋戦争史（下）」	岩波現代文庫
笠原十九司著	「南京事件」	岩波新書
笠原十九司著	「南京難民区の百日」	岩波書店
笠原十九司著	「海軍の日中戦争」	平凡社
本多勝一著	「南京への道」	朝日新聞社
堀田善衛著	「時間」	新潮文庫
半藤一利著	『昭和史』1926~1945	平凡社
図説・日本史通覧		帝国書院
太平洋戦争の記憶	エリック・デュシュマン編集	
	アシェット・コレクションズ・ジャパン刊	

参考文献（南京事件はなかった）

東中野修道編著	「1937南京攻略の真実」	小学館文庫
---------	---------------	-------

お詫び

11ページから文字が小さくなりました。又オリジナル原稿を大幅にカットしましたので不自然さがあります。ご容赦ください。

11ページ以降のオリジナルは

「本ホームページ・ベストピア粗稿」
に掲載してあります。ご興味ある方は開いてください。